

住民の健康を守るために

# 信濃の地域医療

2023・No.535

発行所 長野県国保地域医療推進協議会  
長野県国民健康保険団体連合会  
松本市健康づくり推進員連合会

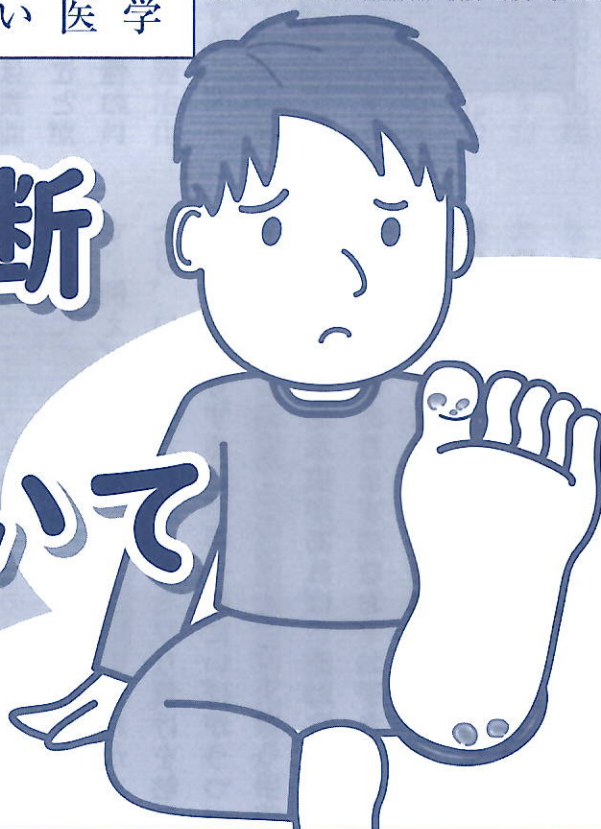
毎月1回発行 2023年1月発行

長野市西長野加茂北 長野県自治会館

やさしい医学

※このリーフレットの無断転載・複製・改変は禁止します。

## いぼの診断 と 治療について



《飯綱町立飯綱病院》

形成外科 堀内 直美

プロフィール



日本形成外科学会会員  
長野市出身  
細かな作業が得意です。

飯綱町立飯綱病院  
形成外科

堀内 直美

「いぼ」とは、皮膚の一部が盛り上がって  
できるできものことです。  
一般の皆さんの言う「いぼ」の中には「ほ  
くろ」や「おでき」も含まれていることがあ  
りますが、ここでは形成外科医あるいは皮膚  
科医の言う「いぼ」に相当する疾患を説明し  
ます。

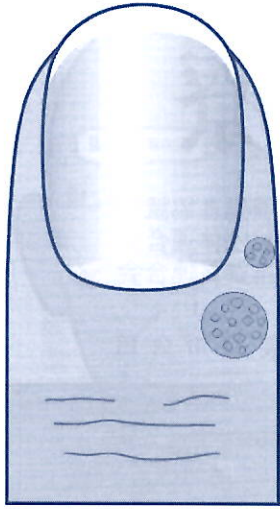




## ① ウイルス性のいぼ

## ▼ ウイルス性疣贅 ▲

もったも一般的ないぼ」は人乳頭腫ウイルス（ヒトパピローマウイルス）が皮膚に感染してできるもので、皮膚科・形成外科医が狭い意味でいう「いぼ」は通常これを指します。子供から高齢者まであらゆる世代の人がかかる可能性があり、潜伏期間は数か月で、ウイルス感染のため家族内でうつる恐れはありますが、命にかかわることはありません。足裏にできた場合は魚の目と間違えられやすく、体重がかかる部位などでは痛みが出ることもあります。手足の指にできるものは表面がざらざらして少し盛り上がっていることが多いです。我々は見ただ目からウイルス性のいぼかどうか診断します。



私たちの皮膚には、ウイルスや細菌などの侵入・感染を防いでいる様々なバリア機構があると考えられていますが、皮膚や粘膜に小さな傷があるとそこからウイルスが侵入してしまったり、何らかの理由で免疫力が低下しているといぼができやすくなりやすくなります。内臓疾患・悪性腫瘍で免疫力が低下している場合、リウマチなどで免疫を抑えるような治療を受けている場合、アトピー性皮膚炎で皮膚のバリア機能が低下しているような場合は注意が必要です。また、これらの疾患がなくても、ウイルス性のいぼができてしまった患者さんはそのウイルスを体がうまく排除できていない状態なので、本人の体の別部位にうつって増えてしまうことがあります。例えば、いぼに触れた指に手荒れがあったり、いぼに触れた手でカミソリ負けを触れてしまったりすると、手や顔にいぼがうつってしまふことがあるのです。ですから手荒れ・肌荒れや足水虫があれば、それらを併せて治す必要があります。なお、お子さんに魚の目ができることは稀なので、お子さんの手や足に魚の目のようなものがあたらウイルス性のいぼを疑ってください。

治療の基本は液体窒素を浸した綿棒をいぼに押し当てる、あるいはスプレーで噴きかける「冷凍凝固」（凍結療法）になります。液体窒素はマイナス196℃とドライアイスよりも温度が低く、冷たいというよりは「しみて痛む」治療で、軽い水ぶくれや血豆のようになった後かさぶたになります。ウイルスに感染した細胞を凍らせて破壊することと、免疫を刺激する目的があります。手足の場合は1回の治療で治ることはまずありません。1、2週間隔で気長に通院することが必要となり、治療に1年以上かかることもよくあります。ほかに保険適応のある治療は漢方薬の「ヨクイニン」（ハトムギエキス）内服もあります。保険適応外で特殊な薬剤を塗る治療を行っている医療機関もあります。電気焼灼・レーザー治療や切除を行うこともあります。取り除いた縁からいぼが再発してしまうことがあります。なお、残念ながらこのウイルス性のいぼに対する特効薬や確実に治る治療法はいまだ存在していません。私は患者さんに「ご自身の免疫の『やる気スイッチ』が入っていぼを追い出せるようになっていくと良くならない」と説明しています。いぼが思うように消えてくれなくても、あきらめずに治療を継続してみてください。



ところで、「みずいぼ」は専門用語で伝染性軟属腫せんせんしゅといい、別のウイルスが原因の別疾患です。やや光沢があり、通常の皮膚色〜白みがかかった色調で、円形、盛り上がった形状、大きさは2〜5mmほどです。病変をひっかくとまわりに広がりやすく、この病気に対する免疫がつけば別部位にうつらなくなるのですが、免疫が成立するまでは増加してしまいます。自然治癒することが多いのですが、アトピー性皮膚炎など肌の弱いお子さんは難治化することもあります。水いぼの治療は形成外科ではなく皮膚科が専門となりますので、皮膚科を受診しましょう。必要に応じてピンセットでつまみ取ったり冷凍凝固、薬を塗ったりするなどの治療を行います。

② 年寄いぼ

▼ 老人性疣贅 ▲ 専門用語で脂漏性角化症しろうせいかくかしま

年配の方の顔などによく見られる、少し盛り上がった茶色〜黒色、表面が少しざらついたできものです。紫外線の影響や皮膚の老化により発生し、主には40代以降に出現します。ウイルスが原因ではないのでうつることはありませんが、年齢が上がるとともに多発することが多く、色調は正常皮膚に近いこともあ

りますし、顔以外に頭、背中・お腹、腕や脚などにも生じます。大きさは数mmから2、3cmくらい、平坦なものから突出したもので様々あり、シミと混ざって混在することも多く、当初シミだったものが盛り上がって脂漏性角化症になることもあります。できものの見た目（ダーモスコープという機械で表面を拡大して見た所見）から脂漏性角化症かどうか診断します。



脂漏性角化症

治療は液体窒素による冷凍凝固、切除、電気焼灼、炭酸ガスレーザーなどがあります。ウイルス性のいぼと異なり漢方薬内服は効果がありません。冷凍凝固した場合、施術後1、2週間のうちに表面がかさぶたになり、入浴したり着替えたり、何かの拍子に剥がれてき

ます（無理やり剥がさないように）。まだ病変が残っていたら追加で冷凍凝固します。冷凍凝固は切除した場合と異なり病変の「根」が残った状態なので、後日また盛り上がってくることが多いですが、切除やレーザーと異なり無麻酔で治療できます。他の病気・悪性腫瘍などの鑑別が必要な場合は、できもの一部または全体を麻酔した上で切除し細胞を調べる「病理組織検査」を行います。なお、脂漏性角化症は悪性化することは稀ですが、ゼロではありません。また、短期間（数か月）でかゆみを伴う脂漏性角化症が背中などに多発する場合は内臓に悪性腫瘍を合併している可能性もあり注意が必要です。

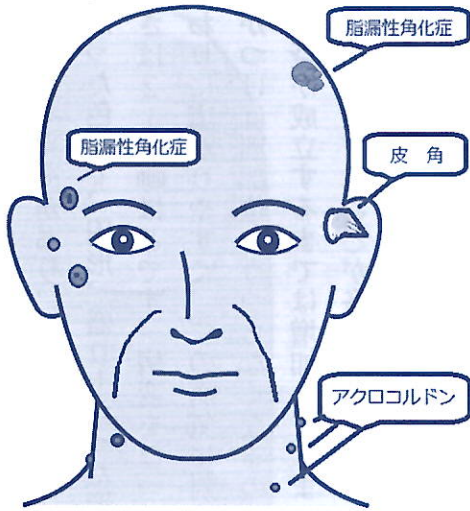
黒いしみのようなもの、黒くて少し盛り上がったできものは「悪性黒色腫」や「基底細胞癌」などの悪性腫瘍の可能性もありますので、「年寄いぼ」と自己判断せずに皮膚科または形成外科を受診しましょう。脂漏性角化症と悪性腫瘍が同一人物の顔に混在して認められることもあります。

この脂漏性角化症と区別が必要なものとして「日光角化症にっこうかくかしま」があります。日光角化症は皮膚の浅いところ（表皮）にとどまってい



る初期の皮膚癌を指し、この状態では転移の心配はありません。60-70歳代から発生頻度が高くなりますが、見た目に様々なタイプがあります。赤くて皮膚表面がカサカサ・触れるとざらざらするもの（湿疹と異なりかゆみはない。たまにチクチク痛みが出る）がある）、茶色いシミのようなもの、ごつごつと隆起しているもの、角のように固く突出するもの（これを皮角といいます）など。

無治療で放置すると次第に隆起して浸潤性の有棘細胞癌（皮膚の深い所にも癌が入り込んだ状態）となりますが、日光角化症から何年経つとこの進行した状態になるかは予測できません。



治療は切除、冷凍凝固のほか、顔や頭部ではイミキモドという塗り薬の治療法があり、これらを組み合わせることもあります。治療方法については、できている部位や数、年齢、合併症を考慮する必要がありますので、主治医とよく相談しましょう。

日光角化症を予防するには、若いうちから余分な紫外線を浴びない、すなわち日焼け対策が重要になります。

**③ 中年いぼ、スキンタッグ**  
**▼ アクロコルドン、軟性線維腫 ▲**

くびや脇など摩擦を受けやすい部位に生じやすい、皮膚にできた小さな突起です。柔らかく、サイズは1〜数mm程度で、多発したり、1個だけ大きくできたり様々です。皮膚とつながっている「茎」の部分が細ければ無麻酔でもハサミで切り取ることが可能ですが、ほかに冷凍凝固なども行います。茎が太ければ局所麻酔をして電気焼灼、あるいは切除・縫合します。良性腫瘍ですが、服の繊維に引っかかって痛い、邪魔になる、などの理由で治療を希望される患者さんが多いです。遠慮せず医師に相談してみてください。

**まとめ**

いずれのいぼも、自分でむしりとりたりはさみで切ったりすると出血してしまうこともありますし、悪性腫瘍でないことを確認する必要がありますので、気になるできものがあれば、皮膚科あるいは形成外科を受診して診察・治療を受けましょう。